

第五十一回 武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

応募総数 二百二十五句

選者 暮目良雨

特選

直角に曲がる参道鎌いたち 日の出町 渡邊敏雄
上下から蛸を聞くだんごどう 練馬区 川村能正
秋霖の山家に大き航空便 立川市 堀江孝晴

秀逸

老鶯の声澄み渡る神の山 豊島区 遠藤風琴
神楽殿補宜の衣擦れ淑氣満つ 新座市 長谷川 栄
山泊まり長押の蜘蛛を祖霊とも 川崎市 濱田ふゆ
霧込めの溪にきぶしの花鎖 青梅市 津布久信雄

佳作

雨あがりレンゲショウマに光る露 杉並区 吉井淳子
花の舞うひとひらごとに吾子笑う あきる野市 岩谷良敬
むささびやりす訪ふ山の診療所 青梅市 山中美枝子
石段のふちをいろどる花のくず 荒川区 田村慎吾
奥の院 朱色さやかに冬麗 宮城野田郡 我妻 遼

選者吟 魚は水に上り天狼傾ぎ見る

第五十二回 奉納俳句募集要項

- 一、作品は未発表に限る
一、受付けは指定用紙にて投句箱へ
(郵送等直接の受付けは致しません)
一、締切り 令和七年一月十五日
一、発表 令和七年三月中旬

奉納俳句選評

直角に曲がる参道鎌いたち 渡邊 敏雄

突風が吹いたあと皮膚に切目が入ることがある。この現象を昔の人は鎌鼬に切られたと信じてきた。鋭利な鎌を持った鼬に襲われたと感じたのである。御嶽神社へ進む参道は曲がりくねっている。気が付いたらどこかに出血の跡があった。角を曲がり付いてきたどこかで鎌鼬に襲われたと思ったことが一句になった。直角に曲がる参道が山中の神社を示している。

上下から蛸を聞くだんごどう 川村能正

だんごどうはケールホール扱いにある登山道の中腹にある団子堂のこと。お地蔵様の膝元に団子をお供えたことから付いた名称だ。この団子堂を起点に上下からも蛸が鳴いている光景が描かれている。作者にとっては全山が蛸の声で包まれていると感じたことだろう。

秋霖の山家に大き航空便 堀江孝晴

秋の長雨の続くある日に山家(御師の家であろうか)に大きな航空便が届いたことを描いた。人の往来の少ない季節だから目立ったのである。外国からの荷物はつい目立ってしまう。荷物の中身は知れずともこの山中が海外とつながっていることを示してくれる、まさに現代の世相を示している。

老鶯の声澄み渡る神の山 遠藤風琴

夏の鶯(老鶯)になるにつれて鳴声は朗々としてくる。はつきりと自己主張する声は木々の間を突き抜けて来る。神の山であればこそ澄みわたる音色を発するであろう。

神楽殿補宜の衣擦れ淑氣満つ 長谷川 栄

年の初めに神楽殿に奉仕する補宜の所作の発する衣擦れの音までもが新年を寿いでいるように厳かに聞こえる。新年に聞く音はすべからず厳かにきこえるものだ。

山泊まり長押の蜘蛛を祖霊とも 濱田ふゆ

御師の家などに泊まった時の光景。長押に見かけた蜘蛛を眺めていると、この家に開闢以来住みついているように思えたというのが句の内容。お山の家にあるすべての物に霊気が宿っているように見えるのは誰しもが体験するだろう。

霧込めの溪にきぶしの花鎖 津布久信雄

木五倍子の花の特徴を生かした作品。枝先に簪を垂らしたように幾本もの鎖状の花を垂らす。霧に包まれた溪谷にきぶしの花鎖だけが浮かんで見えるよう幻想的な作品となった。

御嶽神社あれこれ

武蔵御嶽神社の「尚武」の気風

武蔵御嶽神社の由緒では、日本武尊が東国遠征の際に御嶽山の近くで邪神を撃退し、奈良時代には僧行基が御嶽山に蔵王権現を安置したと伝えています。武勇に優れた日本武尊は、当社の奥宮の男具那社に祀られ、悪魔を退治するために怒りの形相をしている蔵王権現も、廣國押武金日命として本社に御祭神となつています。



剣術流 天然理心流 創術を

- 一木刀 五本
一蔭鏡 七本
一談合 三本
一拓之事
一先之幸
一忘之事
一草仕
一柄薙 三組
一鑿削 二組
一養者 二組
以上

武蔵御嶽神社は「尚武」、すなわち武勇・武道を重んじる由緒や歴史を重ねてきました。その後の「尚武」の展開について、先学の成果に拠りつつ概観しましょう。戦国時代、青梅地方の国人領主三田氏のもと、神主家が

御嶽山を治めていました。三田氏滅亡後、青梅地方は戦国大名北条氏の支配となりますが、神主家は勢力を保ちます。御嶽山の山上には戦国時代の城郭の遺構が残っており、「御岳城は、領主三田氏の庇護を受けながら独自の権力を確立していった武装集団の山城」とする説が出され、北条氏も、甲斐国の戦国大名武田氏の侵攻に備え、青梅地方の武士たちを御嶽山の警護に動員したと考えられています。御嶽山の神主は、武士と神職を兼ねて戦国大名に臣従する在地領主でした。

天正十八年(一五九〇)に関東に入国した徳川家康は、翌年に新領内の諸社寺に対し、改めて領地を寄進しました。大國魂神社・大宮氷川神社・鷲宮神社などの武蔵国の他の地方大社と同じく、武蔵御嶽神社にも家康本人の花押を記した判物が交付されて社領が寄進され、神主に祭祀への専念が指示されます。ただし「武運長久」の祈願も命じており「尚武」の気風が絶たれたわけではありません。元禄十三年(一七〇〇)の五代将軍徳川綱吉による社殿造営の際、綱吉は武蔵御嶽神社に具足二領を奉納しました。八代将軍徳川吉宗は、享保十二年(一七二七)に「赤系威鎧(重忠鎧)」を上覧し、さらに享保十九年(一七三四)には「赤系威鎧」とともに、「日本武尊御鎧」と称されていた「紫裾濃甲冑(重要文化財)」も上覧しています。

御嶽山の御師の出自について様々な伝承があります。江戸時代前期の史料に「神主家が軍役を勤めていた時の家来を御師にした」との記述があり、神主の軍事的な従者から御師へと転身した者がいたと考えられます。江戸時代後期、講中を廻って配札する御師は護身のために帯刀し、剣術を習得します。文化八年(一八一二)、七人の御嶽山御師が天然理心流宗家二代目の近藤三助入門して以来、幕末まで五十名を超える御師たちが天然理心流を学びます。天然理心流は、新撰組の局長近藤勇や副長土方歳三が習得した剣術流派として有名で、近藤

勇は四代目の宗家です。また、慶応三年(一八六七)には開平三知流の額が武蔵御嶽神社に奉納されます。開平三知流は、甲源一刀流の門人だった青梅地方長淵村の三田左内が興した剣術流派です。奉納額には、「門弟」として六人、「当山剣道連」として十九人、「山内世話人」として五人の御嶽山御師の名が見えます。

明治末年前後、小説「大菩薩峠」の構想を練っていた中里介山はこの開平三知流の奉納額を見て、「三田左内相馬宗美」の名を主人公「机龍之助相馬宗芳」の創造に用い、御嶽山奉納剣術試合を着想したといわれています。『大菩薩峠』を機縁とし、武蔵御嶽神社では奉納剣道大会が行われています。本年令和六年(二〇二四)は、十月二十日に第七十八回大会が開催される予定です。

このように武蔵御嶽神社では現在に至るまで「尚武」の気風が受け継がれています。「尚武」は好戦性を意味しません。むしろ「尚武」は、日本と世界、そして講中・氏子・崇敬者をはじめ人びとの平和と繁栄を御嶽大神に祈ることと強く結びついています。本年四月からは当社宝物殿の企画展として、「御嶽山ゆかりの甲冑をはじめとする武具・武器などを展示する予定です。ぜひ観覧いただき、武蔵御嶽神社の「尚武」の気風の一端にふれてもらいたいと思います。

武蔵御嶽神社 奉納剣道大会
開平三知流奉納額再興碑 (随神門横)